

〈研究ノート〉

サ変動詞を形成する V1+V2 型複合名詞 —対応する複合動詞の有無に基づく違いの観点から—

鈴木智美 (東京外国語大学)

【キーワード】 V1+V2 型複合名詞、サ変動詞、対応する複合動詞、辞書、
現代日本語書き言葉均衡コーパス、日本語学習者

1. 本稿の目的

本稿の目的は、「動詞 (V1) + 動詞 (V2)」の形をとる複合名詞 (以下、「V1+V2 型複合名詞」とする) を対象に、「スル」を付加し、サ変動詞を形成することが可能かどうかという点について、対応する複合動詞の有無という観点から探ることを目的とする。

日本語学習者が、辞書などの学習ツールを活用しながら、短文の空欄箇所にあてはまる適当な表現を探し出すという形式の語彙練習問題を行っている際に、V1+V2 型複合名詞について、そのサ変動詞化が可能かどうか判断できなかったという例があった。以下の例 (1) のようなものである。

(1) 警察は、犯人がその男だと _____ することができた (= 犯人が誰か、わかった)。

例 (1) の下線部分には、例えば「特定」「確信」などの漢語動名詞をあてはめることができる。学習者は、母語から日本語への対訳辞書を用いて「割り出す」という語を見つけ、意味的に適当であると考えたのだが、これを、問題文の前後の文脈に合うように「*割り出しする」(「*」は文法的に不適格であることを示す) というサ変動詞の形にして用いてよいかかわらなかつたということであった。

確かに V1+V2 型複合名詞には、「受け渡しする」「盗み見する」「立ち読みする」「行き来する」のようにサ変動詞を形成することが可能なものもあれば、「*行き詰まりする」「*取り巻きする」「*逃げ出しする」「*飲み込みする」「*引き取りする」のように、サ変動詞としては通常用いられないと考えられるものもある。

辞書や日本語の学習参考書において、サ変動詞を形成可能な名詞のすべてに、その情報が漏れなく記載されているのであれば、日本語学習者はその情報に従えば、迷うことはないだろう¹。しかし、その情報が記載されていない場合には、学習者は何らかのべつの基準に基づき、サ変動詞化が可能かどうかを判断しなければならない。では、このような V1+V2 型複合名詞のサ変動詞化の可否については、どのような基準を示すべきだろうか。あるいは、

1 一般に、漢語動名詞(「勉強」「結婚」など)については、一部の例外を除き、ほとんどの辞書に「名詞」および「サ変動詞」という2つの品詞情報が併記されている。見出し項目として挙げられた名詞の下に「スル」と記すことで、サ変動詞化が可能であることを示している辞書もある。一方、上記の「割り出し」のような複合名詞については、サ変動詞化が可能かどうかについて、特に情報の記載のない辞書もいくつか見られる。また、「スル」が付加できるかどうかの判断にも揺れがあり、サ変動詞化の可否については辞書によって情報が異なる場合もある。

明確にそのような基準を示せない場合、少なくとも何らかの傾向性を示すことはできるだろうか。

2. 対応する動詞形の有無

現代日本語の V1+V2 型複合名詞に、対応する複合動詞のあるタイプと、対応する複合動詞がないタイプがあることは従来指摘されている。例えば、「話し合い」「申し込み」などには、対応する動詞「話し合う」「申し込む」があるが、「立ち読み」「思い出し笑い」などについては、「*立ち読む」「*思い出し笑う」のような複合動詞の形は、通常用いられない。

先行研究では、石井（2007）が、3種の辞書を調べた結果、このようなタイプの複合名詞が 461 語抽出できたとしている。鈴木（2014）も、同様に国語辞書をもとに調べた結果、このようなタイプの複合名詞が 499 語抽出されたとし、さらに辞書に記載のない 2 語を加え、計 501 語をリスト化して示している。また、その 501 語の中では、166 語が現代語として分野の偏りなく一般的に用いられるのではないかとし、ある特定の分野（例えば「工芸」「芸能」「住宅・建築」「金融・取引」など）において使用されると思われるものが 250 語、古語の性格が強いなど、現代語としては日常的に用いられるとは考えにくいものが 85 語というように、これを緩やかに分類して示している。

第 1 節の例 (1) で、学習者が辞書で見つけた動詞「割り出す」は、動詞「割る」と動詞「出す」が複合した「V1+V2」型の複合動詞である。「割り出し」という V1+V2 型複合名詞は、この動詞の連用形からの転成名詞となっている。即ち、この V1+V2 型複合名詞「割り出し」には、これに対応する複合動詞「割り出す」が存在する。動的な概念を表現したい場合、対応する動詞があるのであれば、その動詞によってそれを表すことが可能であると考え、あえてこの名詞に「スル」を付けて「*割り出しする」というサ変動詞を形成することは、一般的にはないのではないかと考えたとしても、不自然ではないかもしれない。ただし、第 1 節でサ変動詞化が可能な V1+V2 型複合名詞として挙げた例の中には、「受け渡しする」「盗み見する」のように、対応する動詞「受け渡す」「盗み見る」を持つものも観察される。これらの例が、対応する動詞およびサ変動詞の双方が存在するものとして、例外的に位置付けられるものなのかどうかは、確認の必要がある。

一方、対応する動詞形のない V1+V2 型複合名詞（例えば「立ち読み」は、対応する「*立ち読む」という動詞を持たない）については、対応する動詞形がないのであれば、動的な概念を表したい場合に、例えば「スル」を付加し、「立ち読みする」というサ変動詞を形成すると考えても、これも不自然ではないかもしれない。実際に、対応する動詞形のない V1+V2 型複合名詞には、「行き来する」「食い逃げする」「つまみ食いする」「上り下りする」など、サ変動詞として使用可能な例が複数観察される。対応する動詞形のない V1+V2 型複合名詞については、基本的にサ変動詞化が可能であると一般化することが可能だろうか。この点についても確認する必要がある。

ここでは、このような対応する動詞形の有無という観点を一つの可能性として取り上げ、V1+V2 型複合名詞のサ変動詞化の可否について探ってみることにしたい。以下、第 3 節で対応する動詞形のない V1+V2 型複合名詞についてサ変動詞化の可否を探り、第 4 節で、対応する動詞形のある V1+V2 型複合名詞について、同様にサ変動詞化の可否を見ていく。

3. サ変動詞の形成：対応する動詞形のないV1+V2型複合名詞

第2節で触れたように、鈴木(2014)では、現代日本語において対応する動詞形を持たないV1+V2型複合名詞を辞書に基づき抽出し、現代語として一般的に用いられるもの(166語)、使用分野が特定されると思われるもの(250語)、日常的には用いられにくいもの(85語)に分類して示している。

ここでは、上記の先行研究を参考にしながら、現代語として一般的に用いられると考えられる語を対象として、それぞれサ変動詞化することが可能かどうかを確認してみる。まず、上記166語のうち、辞書には記載がないが鈴木(2014)においてリストに付け加えたとされる「試し書き」「飛ばし読み」の2語をとりあえず除き、鈴木(2014)ではリストに含まれていない「着映え」(辞書に見出し項目としての記載があり、対応する動詞形「*着映える」を持たない)を対象に加える。また、鈴木(2014)では別の語として数えられている「行きずり(いきずり)」と「行きずり(ゆきずり)」を1語としてまとめて扱うことにする。

また、鈴木(2014)では、対応する動詞形が使われ始めていると考えられるものとして、「着回し」「下げ止まり」(動詞「着回す」「下げ止まる」の使用例、および辞書によっては「下げ止まる」という見出し項目が見られる)は、既に対応する動詞形のないもののリストからは除かれている。ここでは、さらに「掛け捨て」「掛け流し」「吹き溜まり」の3語についても、一般の辞書の見出し項目としては対応する動詞形が挙げられていないが、対応する動詞「掛け捨てる」「掛け流す」「吹き溜まる」が既に使用され始めているものと考え²、対象から除くことにした。また、「下げ戻し」「病み煩い」の2語についても、ここでは同様に「下げ戻す」「病み煩う」という形が使用され得る³と考え、対応する動詞形のないリストからは除くことにした。

したがって、ここでは差し引き計159語について、まず鈴木(2014)で使用されたのと同じ辞書(『大辞林 第三版』)を参考に、サ変動詞化の可否を確認する⁴ことにする。その後、当該辞書には見出し項目として採録されておらず、鈴木(2014)で付け加えたとされる上記「試し書き」「飛ばし読み」の2語を含め、辞書における情報が不十分と思われるものについては、コーパス(「現代日本語書き言葉均衡コーパス」)等を活用し、さらに確認を行うことにしたい。

3.1. 辞書における記載情報

まず、辞書に記載されている品詞情報により、上記159語のうち計73語についてはサ変動詞化が可能であることが確認できた。以下の表1にこれを示す。サ変動詞化が可能であるものとして、表中の当該名詞の横にそれぞれ「スル」と記している。

2 本節で使用する「現代日本語書き言葉均衡コーパス」においては、「着回す」「下げ止まる」のほか「掛け捨てる」「掛け流す」「吹き溜まる」も、いずれも1つの動詞語彙素として扱われており、その使用例も見られる。

3 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」では、「下げ戻す」「病み煩う」という形は1つの動詞語彙素としては扱われていない。また、「下げ戻す」の例は見られず、「病みわずらう」が1例見られるのみである。しかしながら、一般の検索エンジンを使用し、ウェブ検索を行うと、金融・相場用語として「下げ戻す」の使用例が複数見られ、また、「病み煩う/思う」についてはやや文語調で、聖書の翻訳文などにその使用例が見られる。

4 『大辞林 第三版』では、見出し項目として挙げられた名詞の下に「スル」と記すことで、サ変動詞化が可能であることを示している。

表1 対応する動詞形のない V1+V2 型複合名詞（現代語として一般的に用いられるもの）159 語のうち
辞書に記載の品詞情報によりサ変動詞化が可能であると考えられるもの（73 語）

上がり下がり スル	飽き飽き スル	上げ下げ スル
開け閉て（あけたて）スル	当て逃げ スル	行き来 スル
討ち死に スル	売り食い スル	追い炊き／焚き スル
置き引き スル	押し売り スル	思い出し笑い スル
買い食い スル	隠し撮り／録り スル	駆け引き スル
重ね刷り スル	貸し借り スル	聞き書き スル
着やせ スル	切り張り／貼り スル	切り盛り スル
食い逃げ スル	敷き写し スル	透き見 スル
添い寝 スル	添え書き スル	抱き寝 スル
立ち売り スル	立ち泳ぎ スル	立ち食い スル
立ち飲み スル	立ち読み スル	使い走り スル
つかみ洗い スル	作り笑い スル	つまみ洗い スル
つまみ食い スル	照れ笑い スル	留め／止め立て スル
殴り書き スル	投げ売り スル	なぞり書き スル
煮炊き スル	抜き書き スル	抜き差し スル
抜き刷り スル	盗み読み スル	寝押し スル
寝泊まり スル	上り下り（のぼりおり）スル	飲み逃げ スル
乗り降り スル	乗り逃げ スル	這い這い スル
量り／計り売り スル	量り減り スル	走り読み スル
挽き売り スル	轆き逃げ スル	臥し起き スル
ふて寝 スル	振り洗い スル	回し蹴り スル
回し飲み スル	持ち逃げ スル	焼き討ち／打ち スル
焼き増し スル	焼け太り スル	遣り取り スル
寄せ書き スル	選り好み（よりごのみ）スル	割り書き スル
割り増し スル		

上記の 73 語を除いた残り 86 語は、当該辞書ではサ変動詞化が可能かどうかは確認できない。ただし、例えば「盗み読み」は上記表 1 にあるようにサ変動詞化が可能であるとされているが、「盗み食い」「盗み撮り」は可能であるとはされておらず、同様に「開け閉て」は可能であるが、「開け閉め」は可能であるとはされていないなど、さらに確認が必要と思われる点も見られる。

そこで、残り 86 語すべてと、鈴木（2014）で付け加えたとされる「試し書き」「飛ばし読み」の 2 語を加えた計 88 語について、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（国立国語研究所）を参考に、サ変動詞の例が見られるか、また当該コーパスの品詞情報として「サ変可能」とされているかどうか⁵について、さらに確認を行うことにした。

5 検索ツール「中納言」を使用し、検索対象のレジスター・ジャンルは特に限定せず、出版年は1970年代を除き1980年代～2000年代（検索可能なデータは2008年まで）を対象として、当該のV1+V2型複合名詞を語彙素として指定し、検索を行った。複数の表記が可能なものの場合には、文字列検索で語彙素をあらかじめ特定するか、あるいは語彙素読みを検索条件に用いた。

3.2. コーパス等における情報

まず、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」で、当該の V1+V2 型複合名詞の品詞情報として「名詞-普通名詞-サ変可能」(下線は引用者)と記されているものについては、すべてサ変動詞化が可能なものとしてとらえることとした⁶。これには、当該コーパス上には「スル」が直接付加した例が見られない場合(以下の表2の中に示す「返し縫い」1語)も含めた。(以下の表2において「スル」と付している全8語である。)

逆に、検索の結果「スル」が付加した例が見られたものの、同コーパスにおける品詞情報としては「サ変可能」とされていないものについては、判断に揺れが生じ得るものと考え、下記の表2においては「(スル)」と()付きで示した。(以下の表2における「逢引き」「覚え書き」「考え違い」「試し書き」⁷「盗み撮り/録り」「読み書き」の6語である。)

また、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」では、品詞情報として「サ変可能」とはされておらず、「スル」が直接付加した例も見られなかった場合でも、一般的なウェブ検索を行うとサ変動詞としての用法が見受けられるものについては、ここでは「(スル)【ウェブデータ】1」と記すことにした。(下記の表2における「着映え」「流し撮り」「紛れ当たり」の3語である⁸。)

また、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」において例が1例も見られず、確認できなかったものについては、念のため一般の検索エンジンを用いてウェブ検索を行い、サ変動詞としての実例が見られるかどうかを探り、判断の参考とした。その結果、サ変動詞としての使用が可能ではないと思われるものについて、下記の表2で「(スル)【ウェブデータ】2」と記すことにした(「恨み死に」「降り乗り」「重ね切り」「崩し書き」「戯れ書き」「作り泣き」「続け書き」「抜き写し」「走り競べ/比べ」の9語⁹)。

以上の確認作業の結果、残り86語のうち26語がサ変動詞として使用し得るのではないかと考えられることがわかった。鈴木(2014)でリストに付加された「試し書き」「飛ばし読み」もこの中に含まれる。以上の結果を以下の表2に示す。

6 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の品詞情報については、「名詞」のうち「名詞-普通名詞-サ変可能」(下線は引用者)とされているものは、「形式的な意味の『いたす』『する』『できる』『なざる』などが直接続き、動詞として用いられることのあるもの」とされている(小原他 2011:48)。また、それは「可能性を示すものであって、実際にサ変動詞の語幹として使われているか否かは問わない」ということであり、即ち、品詞情報に「名詞-普通名詞-サ変可能」と付されている場合には、コーパス内における例の有無は問わず、当該の名詞がサ変動詞として用いられ得るという可能性の判断が示されていることになる。サ変動詞化の可否について判断する際には、この品詞情報を参考にした。

7 現代日本語書き言葉均衡コーパスでは「試し書き」の例が4例見られ、そのうち3例は「～して/～しました」のように「スル」が直接付加した形のものだが、「試し書き」全体は短単位で1つの語彙素とはされておらず、それぞれに名詞「試し」、および動詞「書く」という品詞情報が付されている。

8 「着映え」「流し撮り」「紛れ当たり」の3語については、「国語研日本語ウェブコーパス」で品詞列検索(当該の複合名詞語彙素の直後に「スル」を指定)を行うと、それぞれ254件、609件、95件の例が見られる。

9 これらの9語は、注8と同様に「国語研日本語ウェブコーパス」で品詞列検索(当該の複合名詞語彙素の直後に「スル」を指定)を行うと、それぞれ0件～7件という検索結果となる。一方、一般の検索エンジン(ここでは「google検索」を使用)でウェブ検索を行うと、いずれも種々のウェブページがヒットする。例えば「重ね切りする」については住宅のリフォームや、工芸・工作についての記事、「続け書きする」については書道や世界の言語の文字表記についての記事、「抜き写しする」についてはノート取りや絵画模写の記事などが見られる。

表2 対応する動詞形のない V1+V2 型複合名詞（現代語として一般的に用いられるもの）のうち
コーパス等の情報に基づきサ変動詞化が可能であると考えられるもの（26 語）

逢い引き（スル）	開け閉め スル	恨み死に（スル） 【ウェブデータ】 2
覚え書き（スル）	降り乗り（スル） 【ウェブデータ】 2	返し縫い スル
隠し立て スル	重ね切り（スル） 【ウェブデータ】 2	考え違い（スル）
着映え（スル） 【ウェブデータ】 1	崩し書き（スル） 【ウェブデータ】 2	立ち歩き スル
試し書き（スル）	戯れ書き（スル） 【ウェブデータ】 2	作り泣き（スル） 【ウェブデータ】 2
続け書き（スル） 【ウェブデータ】 2	飛ばし読み スル	流し撮り（スル） 【ウェブデータ】 1
抜き写し（スル） 【ウェブデータ】 2	盗み食い スル	盗み撮り／録り（スル）
走り競べ／比べ（スル） 【ウェブデータ】 2	紛れ当たり（スル） 【ウェブデータ】 1	満ち欠け スル
もみ洗い スル	読み書き（スル）	

3.3. サ変動詞化のできないもの

表1 および表2 の結果を合わせると、対応する動詞形を持たない V1+V2 型複合名詞のうち、現代語として一般的に用いられると思われる 161 語（鈴木 2014 の 166 語に「着映え」1 語を加え、「行きずり（行きずり／ゆきずり）」を 1 語として数えることにし、「掛け捨て」「掛け流し」「吹き溜まり」「下げ戻し」「病み煩い」の 5 語を除いたもの）の中では、計 99 語について、サ変動詞化が可能と考えられる結果になった。逆にサ変動詞としては用いられないと考えられるものは、差し引きすると、計 62 語ということになる。

その 62 語を分類してみると、以下のような特徴を持つものが含まれているのではないかと思われる。

(2) 対応する動詞形を持たない V1+V2 型複合名詞のうち、現代語として一般的に用いられると思われる 161 語の中で、サ変動詞としては用いられないと考えられるもの（62 語）に見られる特徴

a. 動的事態を「～する」ではなく「～になる」／「～にする」と表現するほうが自然なもの：

例) 「言いなり」「生き埋め」「浮き彫り」「聞き納め」「切れ切れ」「飲み捨て」
「乗り詰め」「離れ離れ」「回り合わせ」「結び切り」「持ち腐れ」「雇い止め」
「破れかぶれ」「別れ別れ」

b. 「～する」ではなく「～がある」と表現するもの：

例) 「当たり障り」「当たり外れ」「聞き応え」「好き嫌い」「流行り廃り」「読み応え」

c. 「～する」ではなく「～を言う」と表現するもの：

例) 「負け惜しみ」

d. 「～ならない」という決まった形で表現するもの：

例) 「退き引き（のっぴき）」

e. 「～な」／「～の」の形で名詞を修飾したり、「～に」／「～で」の形で副詞的に用いられるもの：

例) 「誂え向き」「生き写し」「起き抜け」「出し抜け」「建て売り」「食べ盛り」
「通り掛け」「届け済み」「泊まり明け」「泊まり掛け」「抜き打ち」
「働き盛り」「負け嫌い」「行きずり」「忘れ咲き」

f. 動作性の概念を表す場合、ヲ格補語の形をとり「～をする」と表現するのが自然であると思われるもの：

例) 「貸し剥がし」「切り封じ」「忍び笑い」「使い歩き」「慰み書き」
「盗み笑い」「走り使い」「控え書き」「見込み違い」「見立て違い」
「見立て直し」「もらい笑い」

g. 事物や概念の名称などを表し、動詞本来の動作性の感じられにくいもの(「～をする」の形もとらないと思われるもの)：

例) 「歌い回し」「踊り／躍り食い」「勝ち負け」「着倒れ」「極め書き」
「食い倒れ」「暮らし向き」「吸い飲み」「焚き落とし」「勤め向き」
「照り降り」「縫いぐるみ」「寝巻き(寝間着)」

上記(2) a.～g.の特徴は相互排他的なものではなく、例えばa.に挙げた「切れ切れ」「破れかぶれ」などは、「切れ切れになる」「破れかぶれになる」という表現でも用いられるし、e.のように「切れ切れの／に～」「破れかぶれの～」の形でも用いられる。

これら a.～g.の特徴を持つものの中では、「スル」が直接付加するかどうかについて、もっとも境界上にあるタイプはf.に挙げたものではないかと思われる。f.のタイプは「～をする」とヲ格補語の形をとることによって動作性の概念を表すことが可能と思われるものである。例えば、これらの「～をする」という表現が口語表現化によって助詞「ヲ」が脱落するなど、「スル」が直接付加する形で言語慣習的に定着するようになれば(例えば「忍び笑いする」「控え書きする」「貸し剥がしする」など)、サ変動詞化が可能という判断が生じてくる可能性もあると言えるかもしれない。

また、g.に挙げたものの一部についても、動作性の概念を全く表せないということではなく、言語使用の状況が変化することにより、例えば「着倒れする」「食い倒れする」などのサ変動詞が使用されるようになる可能性も否定はできない。さらに、a.に挙げた「聞き納め(にする／になる)」「雇い止め(にする／になる)」、e.に挙げた「抜き打ち(の～／で～)」なども、そのような行為を行うこと全般を指して、例えば「聞き納めする」「雇い止めする」「抜き打ちする」のようなサ変動詞の形で表現することも、言語使用の状況の変化につれ生じてくる可能性が全くないとは言えないだろう。

全般的に見れば、サ変動詞として用いられない以上の計62語については、上記のようにそれぞれに特徴があり、「～になる」などの表現を用いたり、主として修飾語として用いられるなど、サ変動詞としての用法がそれぞれに言語使用上要請されないという理由があると考えられる。ただし、f.のグループはサ変動詞化の可能性を有するものとして境界上にある

と言え、g. の一部のものも、動作性の概念が派生的に形成する可能性を残していると言える。また、その他いくつかのものにも、V1+V2 型複合名詞によって表される意味概念をもとに、その意味の行為一般をサ変動詞を用いて表すという可能性も残されていると言えるだろう。

3.4. 応ずる動詞が現代語として用いられにくいものの場合

また、鈴木 (2014) によれば、対応する動詞形が辞書に記載されているものの中にも、現代語としてはその動詞形が一般的には用いられにくいと考えられるものも観察されている。以下の表 3 に示す 20 語である。辞書により確認すると、例えば「居眠り」「飢え死に」「駆け落ち」「走り書き」「着太り」については、それぞれ「居眠る」「飢え死ぬ」「駆け落ちる」「走り書く」「着太る」という対応する動詞の記載があるということである。

表 3 対応する動詞形があるものの、現代語としてそれが用いられにくいと思われる V1+V2 型複合名詞

上げ下ろしスル	行き帰りスル	行き止まり	居眠りスル
飢え死にスル	浮き沈みスル	売り買いスル	起き伏し／臥しスル
送り迎えスル	押し引き	駆け落ちスル	重ね着スル
着太りスル	飛び入りスル	取り引きスル	伸び盛り
上り下り (のまりくだり) スル	飲み食いスル	走り書きスル	病み上がり

(鈴木 2014:103 をもとに「スル」の付加が可能かどうかの情報を加えた)

また、鈴木 (2014) によれば、このうち「行き止まり」「押し引き」「伸び盛り」「病み上がり」の 4 語を除き、ほかはいずれも「スル」を伴いサ変動詞を形成することが可能であるとのことである (ここでは表 3 において当該名詞の横に「スル」と記載した)。さらに、この場合、コーパスなどに基づき使用状況を探ると、現代語として一般的に用いられにくいと考えられる対応する動詞形 (「居眠る」「走り書く」「着太る」) よりも、サ変動詞 (「居眠りする」「走り書きする」「着太りする」) のほうが自然に用いられるのではないかということが指摘されている。

このことは、対応する動詞形が仮に「ある」とされる場合でも、それが一般的に用いられにくいものである場合には、やはり「スル」を付加したサ変動詞のほうが、動的な概念を表す際には用いられるということを示しているのではないかと考えられる。

また、上記の 20 語のうちサ変動詞を形成しない「行き止まり」「押し引き」「伸び盛り」「病み上がり」の 4 語について見ると、このうち「行き止まり」は 3.3 節の (2) a. に挙げたように「～になる」という表現をするタイプ、「伸び盛り」「病み上がり」は同じく (2) e. に挙げたように「～の」によって名詞を修飾するというタイプ、「押し引き」は (2) f. の「～をする」の形をとるタイプにそれぞれ当てはまるのではないと思われる。

以上の 3.1 節～ 3.3 節における観察結果、および上記 3.4 節の先行研究における指摘をあわせて考えると、対応する動詞形がないもの、あるいは対応する動詞形が用いられにくいものの場合には、動的な概念を表す際、一般的には V1+V2 型複合名詞に「スル」を付加し、サ変動詞化して用いるという傾向性があるのではないかと考えてよいのではないだろうか。ただし、3.3 節で見たように、サ変動詞としての用法が言語使用上要請されないもの (動的

概念を表す際に他の動詞を用いる、主として形容詞・副詞的用法で用いる、もっぱら事物や概念の名称を表すなど) の場合には、当然のことながら、サ変動詞化がなされないということなのではないかと考えられる。

4. サ変動詞の形成：対応する動詞形のある V1+V2 型複合名詞

次に、対応する動詞形のある V1+V2 型複合名詞については、以下の手順で確認を行った。

まず、複合動詞のオンラインデータベースである「複合動詞レキシコン」(国立国語研究所) に収録されている全 2,756 語の V1+V2 型複合動詞の中から、その動詞の連用形を用いた名詞形があると思われるもの¹⁰を抽出した。ただし、このデータベースでは、名詞形においてある特定の意味が派生している場合や、動詞形よりも名詞形のほうが主として使用されるものである場合などに限って、名詞形の情報を記載する¹¹という方針であるように思われる。よって、名詞形が可能であるものすべてについてその形が記載されているわけではなく、名詞形の記載情報があるのは、2,756 語のうち 43 語のみであった。

したがって、そのほかにも名詞形が可能と思われるもの、例えば「歩み寄り」「洗い出し」「受け入れ」「追い出し」「切り返し」「組み合わせ」「差し障り」「すれ違い」「立ち上げ」「積み重なり」「釣り合い」「出迎え」「取り出し」「成り立ち」「乗り入れ」「引き取り」「掘り下げ」「巻き返し」「見直し」「結び付き」「行き詰まり」「分かち合い」「割り込み」等々については手作業でそれらを補って抜き出すことにし、上記 43 語も含め、約 980 語の名詞形を抽出した。抽出にあたっては、第 3 節で使用した「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を用いて、それらの名詞形が 1 つの語彙素として扱われているかどうか、あるいは既存の辞書において見出し項目となっているかどうかを参考にした。

次に、第 3 節と同様の手順を踏み、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」における品詞情報と出現例を参照しながら、それらの名詞形のサ変動詞化が可能と考えられるかどうかを確

10 対応する名詞形の多くは V1+V2 型複合動詞からの連用形転成名詞と考えられるが、例えば第 3 節で触れたように、「着回す」「下げ止まる」「吹き溜まる」などの動詞については、むしろ V1+V2 型の複合名詞(「着回し」「下げ止まり」「吹き溜まり」)の方から、これらの対応する動詞形が生まれていると思われるものである。「複合動詞レキシコン」でも、例えば動詞「しゃべりっぱなす」「出しっぱなす」などは「『しゃべりっぱなし』から」「『出しっぱなし』から」という注書きが付されている。ここでは特に派生の順序は問わず、動詞形に対応する形の連用形名詞形があるかどうかということで見ると。

11 例えば「取り潰す」の名詞形として「取りつぶし」が挙げられているが、「江戸時代に、幕府が大名や旗本の家系を断絶させ、その領地を没収すること」とし、ある特殊な意味においてこの名詞形が使用されるものであることが示されている。あるいは「潰し崩す」については「なし崩しという名詞形で使われることが多い」とし、「なしくずし=物事を少しずつ片付けていくこと。現在では、『誤魔化しながら徐々に悪い方向に変革していく』という否定的なニュアンスで使われることが多い」と記述している。そのほか、当該データベースでは、「当てこすり」「返り咲き」「出し惜しみ」「なれそめ」「引きこもり」「持ち合わせ」等、社会・文化的な背景の理解を要する語に特に着目して名詞形が取り上げられているようである。しかし、例えば「張り合う」については「互いに負けまいと競い合う」との記述はあるが、「張り合い」という名詞形の記載はない。「張り合い」という名詞形には「張り合う」に記載されている意味から派生したと思われる「充実感」や「やり甲斐」といった意味も観察されるが、このような意味的な差異に着目してすべての名詞形が網羅的に示されているというわけではない。

認した¹²。同コーパスの品詞情報で「サ変可能」とされているもの、および品詞情報では「サ変可能」とはされていないが、コーパス上にて「スル」が付加した例が見られるもの（例が1～2例のみのものも含む）は、サ変動詞化が可能ととらえることとした。その結果、これら約980語の対応する動詞形のあるV1+V2型複合名詞のうち、サ変動詞化が可能であると考えられるものとして、以下の表4に示す計98語が抽出された。以下の表4では、3.2節の表2と同様に、コーパスの品詞情報で「サ変可能」とされているものには「スル」、品詞情報では「サ変可能」とはされていないが、「スル」が付加した例の観察されるものについては「(スル)」と記した。

表4 対応する動詞形のあるV1+V2型複合名詞約980語のうち
サ変動詞化が可能であると考えられるもの(98語)

預け入れ スル	言い争い スル	言い逃れ (スル)
居残り (スル)	受け付け スル	受け渡し スル
打ち合わせ スル	埋め合わせ スル	埋め立て (スル)
売り惜しみ スル	売り込み (スル)	追い越し (スル)
思い込み (スル)	買い入れ (スル)	買い占め (スル)
買い付け (スル)	買い取り (スル)	買い戻し スル
書き置き スル	書き込み (スル)	書き取り (スル)
掛け持ち (スル)	飾り付け スル	貸し出し (スル)
貸し付け スル	借り上げ (スル)	借り入れ スル
切り替え (スル)	切り捨て (スル)	組み替え (スル)
組み立て (スル)	繰り上げ (スル)	繰り越し (スル)
凍え死に (スル)	こじ付け (スル)	差し入れ スル
差し押さえ スル	差し替え (スル)	差し引き (スル)
絞込み (スル)	仕分け スル	据え置き (スル)
据え付け スル	住み替え スル	住み込み (スル)
出し惜しみ (スル)	建て替え (スル)	立て替え スル
垂れ流し (スル)	使い捨て (スル)	使い回し スル
使い分け (スル)	つかみ取り (スル)	突き合わせ (スル)
積み立て (スル)	問い合わせ スル	届け出 (スル)
飛び入り スル	飛び込み (スル)	取り扱い (スル)
取り決め (スル)	取り消し (スル)	取り締まり (スル)
取り調べ (スル)	取り立て (スル)	泣き寝入り (スル)
煮崩れ スル	縫い取り (スル)	盗み聞き スル
盗み見 スル	狙い打ち スル	覗き見 スル
乗り入れ (スル)	乗り換え (スル)	張り込み (スル)
引き合わせ (スル)	引き落とし (スル)	引き継ぎ (スル)
引き渡し (スル)	引っ越し スル	振り込み (スル)
振り分け (スル)	待ち合わせ スル	見送り (スル)
見積もり (スル)	見直し (スル)	申し入れ スル
申し込み (スル)	申し立て (スル)	持ち帰り (スル)
持ち込み (スル)	持ち運び (スル)	盛り付け (スル)
焼き付け スル	譲り受け (スル)	読み聞かせ (スル)
割り引き スル	割り振り (スル)	

12 第3節において対応する動詞形のないV1+V2型複合名詞のサ変動詞化の様相を確認する際には、辞書およびコーパスの情報に加えて、一般の検索エンジンを用いたウェブ検索も行った。対応する動詞形のないV1+V2型複合名詞については、「スル」の付加について、今現在の言語使用の状況に合わせた動きがあるように思われ、ウェブなどで確認する必要性が感じられたためである。一方、対応する動詞形を持つV1+V2型複合名詞については、計約980語と数は多いものの、「スル」が付加するかどうかについて、コーパスにおける品詞情報とその例を見ることにより判断にそれ以上の迷いが生じるということとはほとんどないと感じられた。

対応する動詞形のある V1+V2 型複合名詞が約 980 語観察された中で、サ変動詞化が可能と考えられるものは 98 語であるということを考えると、980 語すべての使用頻度が必ずしも一律にすべて高くはないとしても、相対的に見ればやはりサ変動詞化が可能なものの割合は決して高くはないと言えるのではないだろうか。対応する動詞形のある V1+V2 型複合名詞については、基本的には対応する動詞形が動的な概念を表すものとして用いられ、一部の V1+V2 型複合名詞について、「スル」を付加したサ変動詞の形も用いられるようになっていくと言えるのではないかと思われる。

ただし、対応する動詞形と、V1+V2 型複合名詞に「スル」を付加したサ変動詞とが、どのような語については併存し、両者の意味や文法的振る舞いはどのように異なるのかについては、より詳細な分析を行うことは必要であると思われる。例えば、「使い分ける」と「使い分けする」では、当然その意味するところは同じではない。「使い分ける」が動詞「使う」と「分ける」によって構成される動的な事象概念を表すと考えられるのに対し、名詞「使い分け」は対象となる事柄をいわば 1 つのまとまりとして静的にとらえており、その 1 つの事柄を「スル」によって再度行為化して表現している。両者が併存して用いられる、あるいはごくわずかな例ながら用いられることがあるというものも含め、これらの 98 語については、その文法的・意味的な違いについて、詳細に観察・分析する課題が残される。

5. まとめと今後の課題

本稿では、V1+V2 型複合名詞について、対応する動詞形の有無の観点から、そのサ変動詞化が可能かどうかについての確認を行った。

対応する動詞形がないもの、あるいは対応する動詞形が用いられにくいもの場合は、動的な概念を表す際、一般的に V1+V2 型複合名詞に「スル」を付加し、サ変動詞化して用いるという傾向性があると言ってよいのではないだろうかと考えられる。ただし、動的概念を表す際にもっぱら他の動詞を用いたり、その V1+V2 型複合名詞が主として形容詞・副詞的用法で用いるものであったり、あるいは事物の名称を表すものであったりする場合には、必ずしもサ変動詞化は要請されない。

一方、対応する動詞形のある V1+V2 型複合名詞については、基本的には対応する動詞形が動的な概念を表し、一部の V1+V2 型複合名詞については、「スル」を付加したサ変動詞の形も用いられるようになっていくと言えるのではないかと思われる。ただし、対応する動詞形と、V1+V2 型複合名詞に「スル」を付加したサ変動詞とが併存する例については、両者の意味・用法や文法的振る舞いの違いについて、さらに詳細な観察・分析を行うことが必要であると思われる。

引用文献

石井正彦 (2007) 『現代日本語の複合語形成論』 (ひつじ研究叢書<言語編>第 49 卷)
ひつじ書房

小椋秀樹・小磯花絵・富士池優美・宮内佐夜香・小西光・原裕 (2011) 『「現代日本語書き言葉均衡コーパス」形態論情報規程集 第 4 版 (下)』

http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/doc/report/JC-D-10-05-02.pdf

鈴木智美 (2014) 「現代日本語における対応する動詞形のない V1+V2 型複合名詞—辞書に基づくリスト化—」『日本語・日本学研究』第 4 号 東京外国語大学国際日本研究センター pp.95-109

松村明 (編) (2006) 『大辞林 第三版』三省堂

コーパス・データベース

「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」国立国語研究所

http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/

「国語研日本語ウェブコーパス (NWJC)」国立国語研究所

<http://bonten.ninjal.ac.jp>

「複合動詞レキシコン」国立国語研究所

<http://vlexicon.ninjal.ac.jp>

<Research Note>

Which “Verb1+Verb2” Type of Compound Noun
Can Form *Suru*-Verb? :

Determining Factor Being Whether It Has a Corresponding Verb or Not

Tomomi SUZUKI(Tokyo University of Foreign Studies)

【Keywords】 “Verb1+Verb2” Type of Compound Noun, *Suru*-verb, Corresponding Compound Verb, Dictionary, BCCWJ, Japanese Language Learners

The purpose of this paper is to examine which “Verb1+Verb2” type of compound nouns can be used as *suru*-verbs from the viewpoint of whether or not they have corresponding compound verbs. There are two types of “Verb1+Verb2” compound nouns in the modern Japanese language. Type A has a corresponding verb, such as “*tachi-age*” (“*tachi-ageru*”), “*omoi-komi*” (“*omoi-komu*”), “*tori-maki*” (“*tori-maku*”). Type B includes “*tachi-yomi*”, “*iki-ki*”, “*kui-nige*”, “*yose-gaki*”, which do not have corresponding verbs such as “**tachi-yomu*”, “**iki-kuru*”, “**kui-nigeru*”, or “**yose-kaku*”.

In this paper, in addition to dictionaries, the BCCWJ (Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese) was used to examine the possibility of forming *suru*-verbs. As a result, 98 out of around 980 type A compound nouns which have corresponding verbs can be used as *suru*-verbs, such as “*tori-keshi suru/tori-kesu*”, “*tsukai-wake suru/tsukai-wakeru*”. In contrast, 99 out of 161 type B compound nouns which have no such corresponding verbs are used as *suru*-verbs, such as “*tachi-yomi suru*”, “*iki-ki suru*”, “*kui-nige suru*”, and “*yose-gaki suru*”. The exceptions are for some that might form a complement noun with the particle “*wo*”, such as “*kashi-hagashi wo suru*”, “*mitate-chigai wo suru*”, some that have conventional expressions with “*naru*” or “*aru*”, such as “*ii-nari ni naru*”, “*atari-sawari ga aru*”, and some that signify materials such as “*sui-nomi*”.

These results show that the corresponding verbs are generally used to express a verbal conception for type A compound nouns, and *suru*-verbs are used for type B compound nouns to express a concept of action. The differences of grammatical usage and meaning between the corresponding verb and *suru*-verb in Type A, such as “*tsukai-wakeru*” and “*tsukai-wake suru*” still need to be clarified with further study.